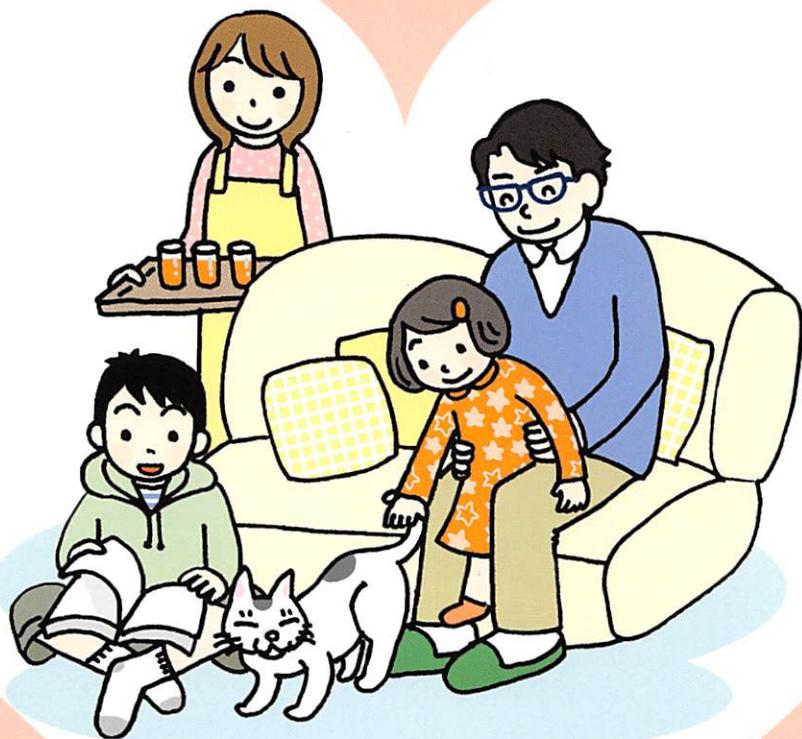


シニアにゃんこ^{との} ハッピーライフ



著 どうぶつの総合病院

監修 安藤純 (川口動物医療センター 院長)

はじめに

ペットフードの質的向上や獣医学の進歩、動物が置かれる環境（飼い主の知識・意識向上）の改善などによって、犬や猫の寿命はひと昔前よりも著しく延びてきています。しかしそれに伴って、以前はさほど見られなかった加齢からくる身体機能の衰えや、それに伴う病気を抱える犬や猫が増えてきています。人間は年齢を重ねると、若い頃には簡単にできたことができなくなったり、注意していたつもりでも思わぬ病気に見舞われることがあります。それは犬や猫も同様です。たいせつな家族の一員である猫にできるだけ幸せなシニアライフを送ってもらい、長生きしてもらうこと、それは飼い主の願いであり、役目でもあります。そのために知っておきたいことをまとめてみました（安藤純：川口動物医療センター 院長）。

Contents

- 001-003 **シニアって何歳から？**
加齢に伴い現れる兆候と注意点：藤井忠之（戸田動物病院）
- 004-005 **猫の腎臓病**
シニアにゃんこの代表的疾患：青山利雄（あおやま動物病院）
- 006 **猫の心臓病** 気づいた時には重症化のケースも…：中村悟（七里動物病院）
- 007 **猫の腫瘍** 猫の死因の3割を占める疾病：中村悟（七里動物病院）
- 008 **猫の甲状腺機能亢進症**
甲状腺ホルモンの分泌が正常よりも盛んになる病気
：宗像俊太郎（あさか台動物病院）
- 009 **猫の口内炎** シニア期や体力低下時に発生しやすい病気
：宗像俊太郎（あさか台動物病院）
- 010 **猫の眼病** 視力低下だけでなく様々な疾病にも注意
：岩井哲（志木いわい動物病院）
- 011 **その他 加齢に伴い発症しやすい病気**
変わったことがあれば早めに動物病院へ：岩井哲（志木いわい動物病院）
- 012-013 **たいせつな食事と日常管理のポイント** 幸せなシニアライフのために
：笠次良宣（かさなみ動物病院）
- 014 **猫の痴呆と介護** 愛情に「いたわり」をプラスして…
：田中嗣彦（美園動物病院）
- 015-016 **たいせつな定期健康診断** シニア猫と幸せに暮らすために
：田中嗣彦（美園動物病院）

シニアって 何歳から？

藤井忠之

家族の一員としていつまでもその愛くるしさが変わらずにいてほしい猫ちゃん。でも、一定の年齢を過ぎると、シニア期に特徴的な様々な症状がみられるようになってきます。では、その年齢とはいったい何歳からなのでしょう？ 人でも個人差があるように猫でもはっきりとした決まりはありませんが、おおよそ8歳からがシニア期とされています。実はこの時期にみられる病気の多くがシニア期に入る前の壮年期（5～8歳）の頃に始まり、そこから徐々に進行するため、この頃から猫ちゃん健康についてより深く観察していると良いでしょう。歳を重ねると、いろいろな部分の機能が低下してくるのは人も猫も同じです。老化とともに起こる体の変化について理解を深めていただき、猫ちゃんたちが快適に暮らせるよう工夫しましょう。

それでは、飼い主である皆様はご家庭でどんなところに気をつければよいのでしょうか？ そのチェックポイントを簡単に述べてみます。

● 皮膚のできものや外観の変化

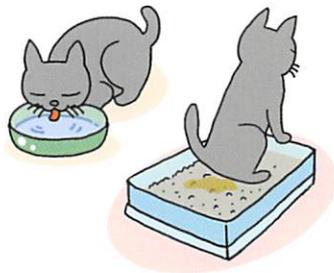
毎日体を撫でたり、抱いたりすることで皮膚のできものや体重の変化に気づくことができます。体重の急激な減少は、腫瘍などの悪い病気が原因の場合もありますので注意が必要です。特に長毛の猫では、かなり痩せても体のラインが毛で隠されてしまうので見過ごされがちです。また、肥満も大敵です。肥満は様々な病気の原因になりますので、高齢期にはカロリーオーバーにならないようにシニア期用のフードなどを利用しましょう。



体重変化に要注意

● 飲水量の変化

最近、高齢の猫に特に目立ってきているのが現代病といわれる糖尿病です。この病気になるとのどが渇くので、猫が急にたくさん水を飲むようになります。一方で水を飲む量が徐々に増えている場合には、慢性経過の腎臓病なども考えられます。飲水量の増加はおしっこの量の増加と関係していますので、おしっこの量にも気をつけてみましょう。



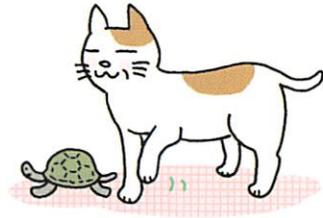
飲水量と尿の量をチェック

● 食欲の増減

ごはんを元気よくいっぱい食べていれば、その様子から病気と思えないこともありますが、糖尿病や甲状腺機能亢進症などでは食欲が普通よりも増加するため安心はできません。また、食欲の低下も年齢のせいだと思わず、見過ごさないようにしましょう。食事の取り方も気にしてみてください。口内炎や歯の病気で上手に食べられないこともあるからです。

● 活動量の変化

もともと高齢の猫ちゃんたちは寝ている時間が多いので、なかなか判断が難しいかもしれませんが、活動量が落ちたり、歩き方がゆっくりになる、あるいは高いところへ上らなくなったなどの症状が見られた場合、目がよく見えなくなっていたり、関節が痛くて動くのを嫌っていることもありますから注意が必要です。



● 行動の変化

おもらしやトイレの失敗など、今までできていたことができなくなったり、今までしなかったことをすることがあります。おもらしなどはいわゆる痴呆の症状以外に膀胱や腎臓の病気に関連していることもありますので、呆けてしまったと思わないで、動物病院に相談してみましょう。

猫の腎臓病

青山利雄

シニア期の猫に最も多く見られる病気のひとつとして腎臓病があります。何らかの原因から腎臓の働きが低下した状態を「腎不全」と言い、時間的な経過の違いにより「急性腎不全」と「慢性腎不全」に分かれますが、特にこの時期で問題となるのは「慢性腎不全」です。

腎臓は、主に老廃物の排泄、水分の調節、ミネラルバランスの調節、造血ホルモンの分泌、血圧の調節など、生きていく上でとても重要な働きをしているため、高い予備能力を有しています。そのため腎臓の機能が低下しても初期ではこの予備能力が働いて異常を検出しにくく、症状も病期がある程度進行しないと現れません。そのため体調の変化に気がついた時には、すでに病状がかなり進んでいたということも珍しくありません。

慢性腎不全の初期症状はほとんどなく、中期になってから、元気消失、食欲低下、体重減少、多飲多尿、毛づやの悪化などが認められます。さらに進行すると食欲不振、嘔吐、口内炎、口臭の悪化、下痢、便秘、貧血、高血圧による眼内出血や網膜

剥離などが認められ、末期には尿毒症から最終的には死を迎えることになってしまいます。

腎臓の組織は一度壊れてしまうと、修復や再生が殆どできないため、慢性腎不全の状態になると完治を望めません。そのために慢性腎不全の原因となる腎臓病を早期に発見し、治療することによって進行を遅らせることが最も重要となります。

慢性腎不全は完全に予防できる病気ではありませんが、ライフステージにあった食事や十分量のお水、清潔なトイレ、室内飼いでゆったりと暮らせる生活環境を整え、一日のおしっこの回数や量を時々チェックし、その上で少なくとも5～6歳をすぎたら定期的な健康診断を受けるように心がけましょう。

元気消失



食欲低下



多飲多尿



毛づや悪化



病気のサインに要注意

気づいた時には重症化のケースも…

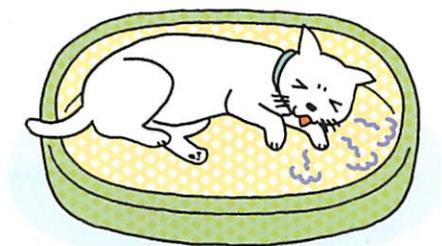
猫の心臓病

中村悟

猫の心臓病は犬ほど多くありませんが、いくつかの特徴的な疾患にかかることもあります。心臓病とは、体が必要としている血液を心臓が十分に送り出せなくなる状態を指します。症状は、元気や食欲の低下、運動不耐性（動くのを嫌がったり、疲れやすいこと）、虚弱、失神、咳、呼吸困難、後肢の麻痺が現れ、胸水や腹水などが見られることもあります。

心臓病の原因には、先天性心奇形、弁膜症、心筋症、不整脈、犬糸状虫症、全身性ならびに肺高血圧症、心膜水貯留、腫瘍などがあります。

猫の心臓病は無症状のことが多く、気づいた時は重症化している場合も珍しくありません。日ごろから息づかいや体調に注意して、異常を感じたら早めに動物病院を受診しましょう。



気づいた時は
重症化しているケースも…

猫の腫瘍

中村悟

猫の死因のトップは、悪性腫瘍性疾患（がん）で全体の約3割を占めていると言われています。がん細胞は正常な細胞と異なり、無秩序で過剰に増殖をはじめ、猫に様々な障害をもたらします。発生部位から離れた場所へ侵入（転移）して、致死的な障害を起こすこともあります。

原因としてウイルスや遺伝子、化学物質の暴露、機械的刺激などが分かっていますが、さらに詳細な原因については不明です。がんの種類としては、リンパ系および造血器系腫瘍（リンパ腫など）、皮膚や皮下の腫瘍（扁平上皮癌など）、乳腺癌、口腔内腫瘍、骨肉腫などが多く見られます。治療は外科手術、化学療法（抗がん剤）、放射線療法、内分泌療法、免疫療法などがあり、がんの種類や病状にあった治療を選んで実施します。

近年は、動物ドックを行っている動物病院も増えてきました。シニア期に入ったら、かかりつけの動物病院に相談して腫瘍を含めた様々な病気の早期発見に努めるようにしましょう。

猫の甲状腺機能亢進症

宗像俊太郎

シニア期の猫に起こりやすい病気で、甲状腺ホルモンの分泌が正常よりも盛んになる病気です。甲状腺ホルモンの影響により、食欲があるのにどんどん痩せていく、嘔吐、下痢、水をたくさん飲む、



行動の変化が病気のサイン

尿の量が多い、呼吸が速い、過剰な換毛がある、爪が伸びやすくなるなどの症状や、少し怒りっぽくなる、必要以上に甘えるようになる、目がぎらぎらするなどの行動上の変化が見られます。また、不整脈や心筋症、腎不全を併発することが多く、病態が進行すると食欲減退、衰弱が見られることもあります。

この時期に上記の症状や急に活動性が増えたなど気になる症状が見られたら早めに動物病院で検査を受けてみましょう。病気を早く見つけ、治療を始めてあげることが大切です。

猫の口内炎

宗像俊太郎

□ 内炎はシニア期や体力の低下した時に発生しやすく、歯茎や舌、口腔の粘膜などに炎症が起こる病気です。ごはんを食べようとしたときや頬を触ったときに猛烈に痛がる、口の中が真っ赤に腫れて出血しやすくなる、よだれで口のまわりが汚れる、口臭がひどいなどの症状が見られます。

口内炎を放置すると、強い痛みからごはんが食べられず、どんどん体力が低下してしまいます。また炎症を起こした部分から細菌が体内に侵入し別の病気を引き起こすこともあります。

歯石だけではなく腎臓病や糖尿病、ウイルス感染など、他の病気が原因で口内炎になることが多いため、症状に気がいたら早めに動物病院に行き、血液検査など全身の状態を調べてもらいましょう。



視力低下だけでなく様々な疾病にも注意

猫の眼病

岩井哲

犬ほど多くはありませんが、猫もシニア期頃になると視力が徐々に低下してくることがあります。また、免疫力が低下して感染症による結膜炎を引き起こすこともあります。定期的なワクチン接種で感染を回避できるものもあります。

また、瞳の色が変化して左右が違って見えるときは、ぶどう膜炎という目の中の炎症反応や腫瘍(がん)が発生している可能性があります。

黒目が白く濁ってくる「白内障」や眼球自体が大きくなってしまう「緑内障」も見られることがありますが、通常これらは他の目の病気から二次的に発生することが多いと言われていません。また慢性腎不全に伴う高血圧によって眼底の血管から出血したり、網膜剥離を引き起こして失明するケースもあります。

猫はビー玉のように美しくて大きな目を持っています。それも猫の魅力のひとつでしょう。日頃からアイコンタクトを取ってよく観察し、おかしいな? と思ったら早めに動物病院に相談して下さい。

その他 加齢に伴い発症しやすい病気

岩井哲

◆変形性骨関節症

加齢とともに関節にストレスが加わり、関節を覆っている軟骨に変化が生じて痛みを引き起こしたり、足を引きずる症状を認めることがあります。これが長期に及ぶとレントゲン検査で確認できるほどの変化が出てきてしまいます。早期に対応することで進行を防ぐことができるので、「動き出すときに違和感がある」「歩き方がおかしい」「高い場所に上れなくなった」などの症状があったら早めに動物病院に相談しましょう。

◆糖尿病

人や犬と同じように糖尿病を発症することがあります。長年にわたって肥満があると発症のリスクが高くなります。症状としては「水をよく飲むようになった」「オシッコが多くなった」「食欲が旺盛なのに痩せてきた」などがみられ、進行すると吐き気や昏睡状態となり命を脅かすようになることがあります。治療としては肥満の猫は減量と飲み薬で効果がみられるケースもあると言われていますが、多くの場合は人や犬と同様に家庭でのインスリン注射が必要になります。

◆便秘症

加齢とともに腸の機能が低下して便秘症になってしまう猫がいます。ただし便秘症は前述の腎不全や糖尿病による脱水症状、また脊椎（背骨）の老齢性変化に伴う神経機能の低下などでも起こることもあります。

たかが便秘と思わずに3～4日ウンチが出ないときは動物病院に相談して鑑別診断と適切な排便処置を行ってもらいましょう。

変わったことがあれば早めに動物病院へ

たいせつな食事と 日常管理のポイント

笠次良宣

この時期の猫は様々な病気にかかりやすい状態にあり、特に食事管理が健康維持に重要な役割を果たします。この時期の猫は体の代謝機能が徐々に低下してくるため、良質のたんぱく質と脂肪を与えるようにします。また、消化性の良い炭水化物を増やし、カロリーや塩分は控えましょう。ただし、極端にバランスを崩すような食事は与えないように注意しましょう。シニア期の猫は壮年期の成猫に比べ1日に必要とするエネルギーの量が低下します。しかし、食欲自体は極端に落ちるわけではなく、シニア期に入っても同様の食事のままであると必要以上のカロリーを摂取していることになり、肥満体になりやすくなってしまいます。そこでこの時期に見合った食事内容に変更する必要があります。



シニア期に適した食事に
きりかえ

日常管理のポイントとしては、以前に比べて痩せてきていないか、食欲の有無（特に、食欲がありすぎる場合はおかしい）、飲水量および尿量の増加はないかなど普段の様子を細心の注意を払って観察することが大切です。他の項でも取り上げているようにこの時期には慢性腎不全、甲状腺機能亢進症などが発症しやすく、糖尿病や歯周病などにも気をつける必要があります。

食事管理とともにできる限りの病気予防を実施し、早期に発見・治療を開始することが、より良い生活の質を保つことにつながることでしょう。定期的に動物病院で身体検査を中心に、尿検査、血液検査、場合によっては画像診断を実施してもらうべきでしょう。そしてなによりも「おかしい」と思ったら、様子を見過ぎず、すぐに主治医に相談するべきでしょう。



「おかしい」と思ったら主治医に相談

猫の痴呆と介護

田中嗣彦

人と同じように猫も痴呆症になることがあります。ある研究結果では、11～15歳の猫の28%に、15歳以上の猫の50%に認知障害症状が確認されたと報告されています。猫の痴呆症状は様々で、夜鳴きやウロウロと徘徊する、いつものトイレ以外で排泄する、異常な食欲増加、攻撃性の増大などを示す場合もありますが、あまり動かなくなった、よく寝る、無関心などといった症状のみがみられることもあります。他の病気との判別は難しいので、気になる症状がみられたら動物病院に相談してください。

進行した痴呆症の猫たちには排尿・排便の介助や床ずれ防止などの人の介護が必要になります。これまでの愛情に「いたわり」をプラスして、介護グッズを賢く利用したり、動物病院に相談して一緒に快適な介護生活を送れるようにしましょう。



たいせつな 定期健康診断

田中嗣彦

互いに寄り添いながらともに生活している可愛い猫たちも知らず知らずのうちにシニア世代になっていきます。シニア期の猫がより充実した幸せな生涯を送るためには、病気を未然に防ぐための予防（ワクチンや食事管理）と定期的な健康診断が重要です。定期的な健康診断を受けることで、病気の早期発見・早期治療が可能になり、病気になりやすい原因を減らすとともに、もし病気になっても生活の質を落とさないようにすることが可能になります。健康診断は5歳を過ぎたら1年に1回、8歳以上では少なくとも半年に1回は定期的に受けるようにしましょう。

一般的に健康診断は、身体検査（視診、聴診および触診など）のほかに、年齢等を考慮して様々な臨床検査を実施しています。

尿検査

尿検査は尿の濃さ、たんぱく質、糖分、血液、細胞成分などを検査することで体内の多くの異常を発見することができます。尿量や排尿回数について普段から気にかけておくことが重要です。

検便

寄生虫の有無や消化管の炎症などを調べることができます。色や臭い、硬さが普段と違っていないかを確認しておくことも重要です。

血液検査

全身を流れる血液を検査することで健康状態を知ることができます。血液検査には赤血球・白血球・血小板などの細胞成分を検査する「血液学的検査」と血液中に含まれる物質を検査する「血液化学的検査」があります。

ウイルス検査

ウイルスが様々な疾患に直接あるいは間接的に関与しています。感染していないか検査するとともに、予防できるものはワクチンを接種しましょう。

その他の検査

このほかに「レントゲン検査」「超音波検査」「心電図」「内視鏡検査」などがありますので、動物病院の先生と相談してみてください。

覚えて
おきたい！

猫のお薬飲ませ方&使い方テクニック

錠剤の場合



1 片方の手で頭を保定し、もう片方の指先で口を開きます。



2 錠剤を口の中の、なるべく奥のまん中へ入れます。



3 口を閉じさせて鼻先を上に向け、喉をさするようにします。

粉薬の場合



1 ほっぺたを外側にひっぱり、口の中を少し広げます。



2 口の中の、歯とほっぺたの間に粉剤を入れます。



3 ほっぺたを外側からもんで粉剤を唾液と混ぜ合わせます。

あなたの愛猫こんな症状ありませんか？

● …よく見られる

● …時々見られる

症状別早期発見チェックリスト

どこがおかしい？	病名・病状	ウチの子チェック	慢性腎不全	心臓病	乳腺腫瘍	甲状腺機能亢進症	口内炎	白内障	変形性骨関節症	糖尿病	痴呆
目	目が白く濁っている							●		●	
	口臭が強い		●				●				
口	歯肉が白い		●	●							
	よだれが出る						●				
腹	心臓の鼓動大			●							
	乳房にしこり				●						
便・尿	排便・排尿が困難										
	多飲・多尿		●			●				●	
	下痢					●					
	失禁する									●	●
体調	元気がない		●	●							
	咳をする			●							
	呼吸が荒い			●		●					
	運動を嫌がる			●					●		
	食欲不振		●			●	●				
身体	嘔吐する		●			●				●	
	やせてきた		●	●		●				●	
	貧血		●								
生活	足を引きずる								●		
	起き上がりが鈍い								●		
	階段を嫌がる								●		
	ジャンプできない			●					●		
	狭い所に入りたがる										●
	異様な鳴き声を発する										●
備考	夜中に放浪する										●
			疾患 高齢猫の代表的な	無症状のことが多い	犬より悪性腫瘍になる割合が高い	シニア期なのに異様に元気な様子は要注意	シニア期や体力低下時に発生しやすい		加齢に伴い多くみられる	長年にわたる肥満が発症リスクを高める	
	掲載ページ		4	6	7	8	9	10	11	11	14

Column

ねこちゃんは「調子が悪い」と言えません

ねこちゃんは「痛い」「苦しい」と思っても言葉で伝えることはできません。特に病気の初期段階は症状が軽いため、毎日接している飼い主さんでも気づくのが難しいケースが多くみられます。定期的に健康診断を受けることで、病気を早く見つけられますし、何も異常がなければ安心して生活できますね。



ずっと
一緒に
いたいから



●気になることがあれば当院へご相談ください。

 **NOVARTIS**
ANIMAL HEALTH

ノバルティス アニマルヘルス株式会社
東京都港区西麻布4丁目12番24号

ノバルティス カスタマーサービス TEL.0120-162-419
月～金 9:00～12:00 13:00～17:00(祝祭日除く)

FTK1008-85-MS